シーワールドのアニマル達

●バンドウイルカのスリム

当館では、現在４種34頭の鯨類を飼育していますが、その中で最も長く飼育されているのがバンドウイルカの「スリム」です。これは、日本で現在、飼育されているバンドウイルカの中でも２番目に長生きをしているイルカです。

スリムは、昭和46年11月、静岡県伊東市の川奈より当館へ搬入されたメスの個体で、搬入当初は細い体型だったため、ニックネームが「スリム」と名付けられたのですが、今では体長 286 cm、体重 330 kgと立派な体格となりました。数年前まではイルカショーのスターとして、迫力のあるジャンプで活躍し、多くのお客様にイルカの素晴しさを見せてくれていました。活発で気が強い性格のスリムですが、仲間のイルカの出産時には乳母役をつとめるやさしい一面も持っています。また、スリム自身も計４回の出産・育児の経験を持ち、母親としてもベテランのイルカです。

現在では、スリムの伴侶として昭和60年３月に搬入されたオスのバンドウイルカの「ウルフ」と共に今後の繁殖計画の一端を担っています。今は彼等の恋の季節で、２頭仲良く泳いでいることが多く、もしかすると来年の今頃には、可愛らしいベビーが誕生しているかもしれません。

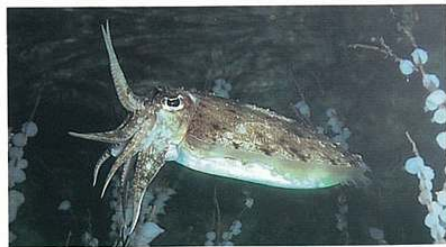
ショーや出産で活躍してくれた18年目を迎えるバンドウイルカのスリムには、これからも元気で長生きしてもらい私達にもっと多くのことを教えてくれることを願っています。どうぞ皆さんも声援して下さい。　　（佐伯）

▲バンドウイルカ *Tursiops truncatus gilli* のスリム

●コウイカ

コウイカはおもに内湾に棲むイカで、スミイカの別名が示すように、イカの仲間では特にスミを吐く量が多く、本種の展示で最も苦労するところです。時々お客様に水槽のガラスをたたかれ、おどろいてスミを吐いてしまうことがありますが、あまりにもスミの量が多いため一瞬のうちに水槽が真っ黒になってしまい、水を交換するのにおおわらわとなります。

ふだんはあまり泳ぎまわらず、水底や中層でじっとしていることが多い物静かなイカですが、産卵期になるとオスがメスの気をひくために派手なディスプレイを行ない、独特のシーンを見せてくれます。腕をいっぱいに広げ体色を頻繁に変え、これが同じイカかと思うほどです。やがて水槽内にあるこう腸動物のヤギや沈んだ木の枝に卵を１粒ずつ産みつけていきます。海では卵に海底の砂や土などを付着させてカムフラージュしますが、水族館では卵の様子がよくわかるように水槽には砂を入れていません。産みつけられた卵は約60日でふ化しますが、当館の水槽では４～６月になるとふ化したばかりの５㎜ぐらいの子どもの姿が見られます。

当館ではコウイカのこれらの様子を約２分間に編集したビデオを水槽の前で放映し、いつでもこの興味深いシーンをお客様にご覧いただけるようにしています。　　（森）

▲コウイカ *Sepia esculenta*

さかまた No.33　（禁無断転載）
編集・発行　鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121
発行日　平成元年８月

さかまた

鴨川シーワールド　NO. 33

華麗なハイジャンパー
シーワールドのカマイルカ達

▲白と黒の美しいコントラストをもつ カマイルカ

背ビレの模様に注目。鎌そっくり!?

当館のイルカショーでダイナミックなジャンプと、器用な動作の数々を披露してくれる「マリンジャンパーズ」は、バンドウイルカ2頭とカマイルカ2頭でチームを組んでいます。主役は、イルカの代表選手ともいえるバンドウイルカですが、カマイルカも、ひと味違った演技でスタンドを沸かせてくれています。野球でいえば、バンドウイルカは、主砲のクリーンナップ、カマイルカは、技巧派の1、2番バッターといったところでしょうか。今回は、その華麗なハイジャンパー、カマイルカ達にスポットを当て、当館での生活ぶりを紹介します。

カマイルカは、イルカの中では小型で大きなものでも体長は2.5mぐらいで、オスはメスよりやや大きくなります。紡錘形の体とコントラストのきいた美しい体色は、このイルカの人気のひとつといえるでしょう。

英語では、バンドウイルカのようにはっきりとした「くちばし」をもっているイルカの仲間をドルフィン（Dolphin）ネズミイルカのように「くちばし」が不明確か、またはない仲間をポーポイス（Porpois）と呼んで区別しています。カマイルカは英名では、Pacific White Sided Dolphinと呼ばれるように、ドルフィンの仲間に入りますが、その「くちばし」はバンドウイルカなどに比べると大変短かく、小さなものです。また、和名のカマイルカの名前の由来は、体の大きさに比べ大きく目立つ背ビレの形と色が草を刈る時に使うカマ（鎌）に似ていることから名づけられたものです。体色は白と黒のツートンカラーで、背部の黒色に2本の白色の細い線が走り、体側面は前半部が白色、後部は黒色で、腹部は白色になっています。

このカマイルカは、自然界では北太平洋の温暖水域以北に生息していて、日本近海でも多数見ることができます。また、群で行動をし、数百から数千頭という大群をつくることも珍しくありません。イルカは一般には、餌を探したり、繁殖のためにある水域を移動していますが、カマイルカも季節によって日本各地の沿岸に近づきます。房総の沿岸では、毎年3月から5月にかけて定置網に迷い込み、地元の漁業者から連絡を受けることがしばしばあります。

それでは、当館で飼育されているカマイルカについて、その捕獲からショー出場までの道すじを追ってみましょう。カマイルカは、日本の水族館では比較的多く飼育されている種類ですが、バンドウイルカに比べ、その数は少ないのが現状です。この理由として、カマイルカは、動きが素速く、集団行動が実に巧みであるため、バンドウイルカよりも捕獲が難しいことが挙げられます。今年も、5月18日に東京湾に面した千葉県の岩井の定置網にカマイルカが迷い込んだという連絡が入り、2頭を搬入しました。このように連絡が入ると、す

▲定置網に迷入したカマイルカ（岩井定置）　▲船上輸送：イルカの状態に十分気を配ります。

▲注意深くプールに収容

ぐに情報を整理し、捕獲された場所へ、輸送道具一式と薬品類を積み込み車でかけつけますが、イルカはすでに港に揚げられている場合が多く、そのような時には、網によってスリ傷を負っていたり、取り上げ時に呼吸孔から水を飲んでしまっていることがあります。そこで、イルカを車に乗せると、まず傷の手当てや肺炎予防のための抗生物質の注射などをした後、すみやかに、そして注意深く輸送します。そして、体長、体重、性別を調べ、更には体温、脈はくを計り、血液検査などを実施したのち、プールに収容します。まずは、捕獲、輸送時の疲れをとり新しい生活環境に慣らさなければなりません。カマイルカは比較的体も小さく、神経質なため、プール内の仲間関係など、他のイルカの仲間よりも気をつかいます。また、特に春から夏にかけて、気温の変化が激しく、水温が上昇する時期には体調不良になり、かぜをひいたり、おなかをこわしたり、肝臓などの病気になることもしばしばあります。そのような時には環境の変化に応じて、餌の量や種類などを見直して与えるようにしています。当館のカマイルカ達の餌は、サバ、ホッケ、シシャモ、アジ、キュウリウオなど赤身の魚から白身の魚までをとりまぜ与えています。カマイルカは、海では小魚やイカを食べていますが、飼育下ではいろいろな餌を与えるので、好き嫌いなく食べさせるのには、ひと苦労します。ウロコを取ったり、餌の切り方を変えたり、さまざまな方法を使って食べやすく加工しますが、そんな時には、好き嫌いの多い子供をもつお母さんの気持ちがよくわかります。このようにして、係員にも環境にも慣れてくると、周りのものに興味をもちはじめ、さまざまなジャンプをしたり、急にスピードを出して泳ぎ出したりする、遊びの動作を見ることができるようになります。すると、いよいよ訓練のはじまりです。ハイジャンプやドルフィンステップ、宙返りなどカマイルカならではの、機敏でキレのある動作を引き出し、磨きをかけていきます。そしてバンドウイルカ同様、訓練を開始してから半年から1年で、20種目以上の演技をマスターさせショーのスターとして出場させます。

それではここで、当館の7頭のカマイルカ達を紹介してみます。

アロー：ショー出場5年目のベテラン。マリンジャンパーズ一番のハイジャンパー、冷静で的確な演技はチーム№1。

サ　ム：アローのよき相棒で、同じくショー出場5年目。しかし、まだまだ遊び好きなヤンチャボーイ。ショー中に係員を困らせることもしばしば。

ベ　ガ：ショー出場を目ざし、もっか訓練中。好奇心は旺盛、でもちょっと怖がり屋。

当館に来て2年目の雌2頭：まだ名前はない。近いうちに可愛らしい名前をつける予定です。

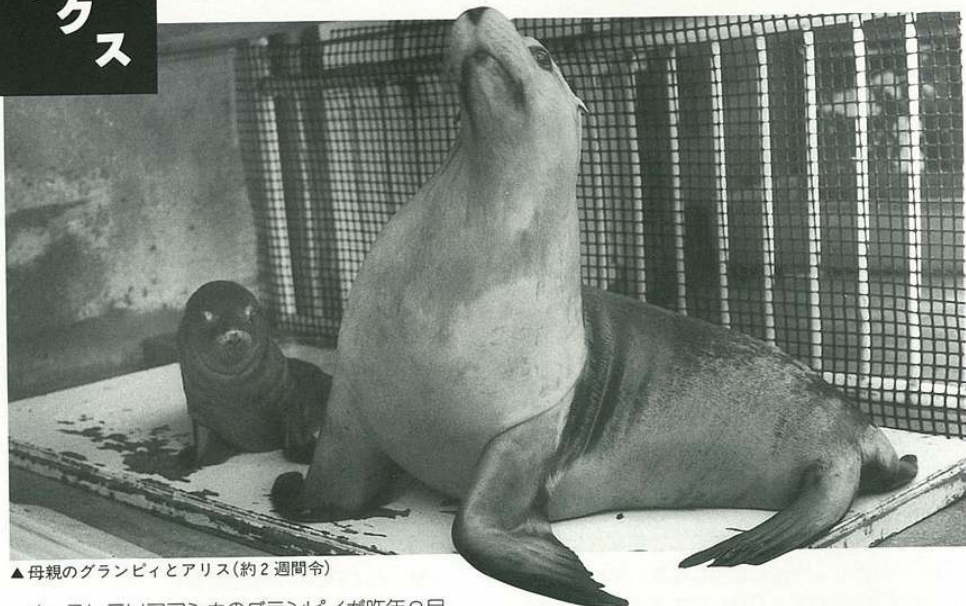
先月、仲間入りした雌2頭：やっと新しい環境にも慣れ、そろそろ個性を出しはじめている。

以上、現役バリバリのスターから、将来有望の金の卵まで、シーワールドの頼もしいカマイルカファミリーです。

当館をはじめ、全国的にもカマイルカの飼育頭数は増えてきていますが、飼育下での繁殖の例はまだ少なく、当館の7頭のカマイルカ達には"是非、元気な赤ちゃんを"と大きな期待がかかっています。皆様も、その時を楽しみにお待ち下さい。

（金原）

▲息もピッタリ、コンビネーションハイジャンプ

トピックス

オーストラリア アシカの人工哺育

▲母親のグランピィとアリス（約2週間令）

オーストラリアアシカのグランピイが昨年9月3日に待望のメスの仔を出産しました。グランピイにとっては3度目の出産であり、何の問題もないと思われていたのですが、残念なことに出産後体調を崩し死亡してしまいました。そこでやむなく仔を海獣診療センターに移し、人工哺育を始めました。親につきっきりの甘えん坊でしたので、係員に慣ついてくれるか心配でしたが、そんな心配をよそに2日後には、係員のひざの上で哺乳瓶からミルクを呑み、甘えてくるようになりました。

名前はアリス。不思議な人間の国に飛びこんできたことから、「不思議の国のアリス」にちなんでつけられました。アリスはとてもおおらかな性格で、すぐに同じ年に生まれたカリフォルニアアシカの仔達とも仲良く遊び、特製ミルクでどんどん体重も増え、母親代りの係員のひざの上も手狭になってきました。

9ヶ月をすぎた現在では、体重35kgとなり、餌付けも成功して小魚を食べるようになりました。

今はまるで男の子のように元気一杯のアリス。将来は現在飼育している同じオーストラリアアシカの「オカ」君のお嫁さんになる予定。そしていつかお母さんに。どんなお母さんになるか今から期待しています。

（柴田）

◀大きな赤ちゃん!? 1ℓのミルクを一気飲み！

▲只今、小魚と奮闘中。換毛が終わり、体色は白っぽく変化している。

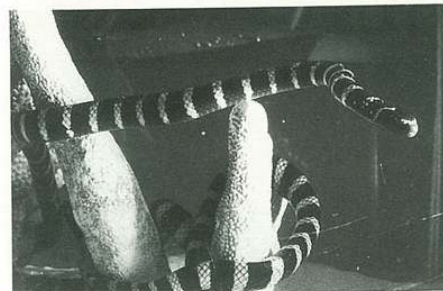
干支の生物「うみヘビ」くん

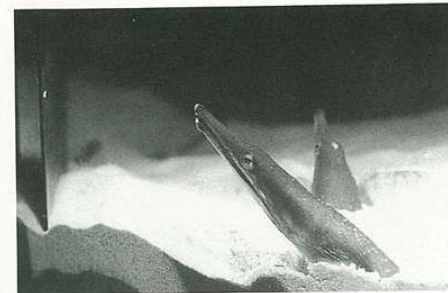
▲魚類と爬虫類のウミヘビを比較した「うみへびくん」特別展示

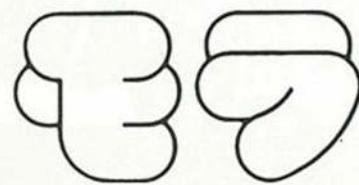
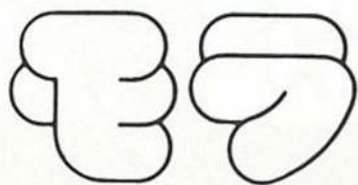
平成元年の干支は「巳」です。これは本来爬虫類のヘビを指す言葉ですが、魚類の中にもウミヘビと呼ばれるものがあります。そこで今年の干支の生物展は、魚類（ダイナンウミヘビ・スソウミヘビ）と爬虫類（エラブウミヘビ・ヒロオウミヘビ・イイジマウミヘビ）のウミヘビ比較展示コーナー『うみヘビくん』を行ないました。

「ヘビ」、ただ単に気持悪いという、人間の一方的な感情だけで、昔からこの動物ほど嫌われてきたものはいないでしょう。ダイナンウミヘビの前で「これは魚でアナゴの親戚です。」といくら説明しても、ヘビという名前を見ただけで顔をしかめ、目を伏せて走り抜ける人もいて、ヘビの強烈な印象をなかなか取り去る事はできません。それでも各々の"ウミヘビ"を見比べて「エラがある」,「尾の形が違う」,「水面まで息をしに上ってくる」などと熱心に観察している家族連れがいたり、なかには「爬虫類のヘビもよく見るとかわいい顔をしている」と新しい発見があったり、なかなかにぎやかな展示となりました。

今回の展示は、「先入感だけで動物を見てはいけない。なかにはとんでもない誤解をしているものもある。印象だけで判断せず、よく見るということで新しい魅力を探し出す努力も必要である。」ということを教えられる展示でもありました。

（津崎）

▲ヒロオウミヘビ *Laticauda laticaudata*

性格はおとなしいが、それでもハブの100倍も強いといわれる毒を持っているので、その扱いはおのずと慎重になります。

▲ダイナンウミヘビ *Ophisurus macrorhynchus*

不幸にしてヘビと名がついたばかりに誤解されてしまう気の毒な魚です。

●シャチ3頭の愛称決定

5月5日「子どもの日」にオーシャンスタジアムにおいて、昨年3月にアイスランドより搬入されたシャチ3頭の愛称発表が行なわれました。オス(4才)は、将来への期待をこめて「オスカー」、メス（6才）は、頼りがいのある女性像をと「マギー」、そして、もう1頭のメス（4才）は、未来に輝く星のように「ステラ」と命名されました。これらの名前は、一般から公募致しましたが、過去最高の13,606通もの応募を頂き、その中より愛称選考委員会において厳正審査の結果、決定したものです。愛称の決まった3頭は、先輩の「ビンゴ」（オス、7才）と共に、連日華麗でダイナミックなショーを披露しています。

（佐藤　栄）

●通算入園者数1,500万人達成

去る5月5日、鴨川シーワールドは通算入園者1500万人目のお客様をお迎えしました。記念すべきお客様は、栃木県栃木市の羽鳥加奈子さん（31才）で、この日、ご主人、お子様2人と10時50分頃入園されましたが、司会者より1500万人目の入園者であることを告げられ、感激の面持ちでした。その後「オーシャンスタジアム」に場所を移して記念セレモニーが行なわれ、鳥羽山水族館長より、感謝状、記念品並びに副賞が贈られました。スタンドを埋めつくしたお客様からも大きな拍手が起り、最後にシャチの「ビンゴ」からも祝福のキスのプレゼントがありました。1500万人の入園者を一区切りとして、なお一層皆様に喜ばれる様な水族館にして行きたいと思っております。　（荒木）

●マリンワールドへ技術協力

本年4月、福岡に新しい水族館「マリンワールド海の中道海洋生態科学館」がオープンしましたが、当館はこの水族館へイルカ、アシカの飼育調教に関する技術協力を行ないました。イルカの飼育は、佐賀県呼子町の沖合にある小川島の港の中に網イケスを特設して行なわれ、ここで約8ヶ月という期間で20数種目を調教したあと、マリンワールドの新プールに移動しました。

そして、4月18日に無事ショーはオープンしましたが、九州での本格的なイルカ、アシカのショーは初めてということもあり、連日訪れるたくさんの方々より、大変な好評を博しており、この仕事にたずさわった担当職員は、今までの苦労が実りホッと胸をなでおろしています。

（桐畑）

●第1回 研究集会開催

昭和63年8月、鴨川シーワールドの中に野生水生生物に関し種々の研究をすることを目的とした「国際海洋生物研究所」（鳥羽山照夫所長）が設立され、今年3月には「'89人と海洋生物との共存に関する国際シンポジウム―人と鯨との共存を求めて―」と題した第1回研究集会が、鴨川にて開催されました。本会には、ブラウネル博士（アメリカ哺乳動物学会会長）他、国の内外より各研究分野の第一人者10数名の講演者を含め約80名が参加し2日間にわたり行なわれました。また、記念講演会（参加者約300人）では、大隅清治博士(遠洋水産研究所所長）による「ヒトとクジラのかかわりあいの過去・現在・未来」、C.W. ニコル氏の「海の哺乳動物と狩人」の2題の講演が行なわれました。

（大嶋）